

中瀬有紀

## エンターテインメントの 天才と仕事について



©Yuki Nakase

ロングウォーフ劇場にて『流星群』の客入れ明かり

スティーブ・マーティンさんの新作戯曲『流星群』に照明家ドナルド・ホルダーさんのアソシエイトとして従事しました。今年8月にカリフォルニア州サンディエゴのオールドグローブ劇場にて、また10月にコネチカット州ニューヘブンのロングウォーフ劇場にて世界初公開されたこの演劇は、結婚生活19年を迎えた40代の夫婦を題材にしたコメディです。オールドグローブ劇場はアメリカ最大級といわれるサンディエゴ動物園と同じ公園内にあります。8月は夏休み中の子どもたちを連れた家族連れで溢れる昼の賑わいと、ポケモンGOに熱中する若者たちの顔が青白く光る夜の盛況との対比が印象的でした。10月のコネチカットではすでに紅葉が始まり、深い緑に混じった赤と黄の葉が風に揺れ、劇場から一歩外へ出るといつも青空にカモメが舞っていました。秋晴れが続くロングウォーフ劇場での2週間は、実際の天候と裏腹に私にとっては嵐のような毎日でしたが、とても充実した時間となりました。

マーティンさんとの出会いは、こういう人がアメリカのエンターテインメントを作り上げてきたんだと、納得させられるものでした。戯曲家であり、作家であり、俳優であり、歌手であり、コメディアンであり、プロデューサーであり、12月に4歳の誕生日を迎える娘の父である71歳の彼が書く戯曲は、ブラックな笑いをもたらすだけでなく、心をほんわかと温めてくれる人情にあふれています。ここに書くことを躊躇してしまうような、でも本番では毎度大きな笑いを誘う下ネタから、「学ぶことは苦痛だね。でも痛みこそが学びだと思う。」というような聴くものを勇気つけるような台詞までさまざまで、一語一句聞き逃すことができませ

ん。役者へのアドバイスや照明に関するコメントが的確で、なおかつ彼の存在は作品に関わる全員の意識をものづくりに集中させる力があります。

「サンディエゴの作品をそのままニューヘブンにもち込む予定が、なんだか大変になっちゃったなあ」と言ったのはホルダーさんですが、ロングウォーフ劇場の時間が私自身にとって嵐のような毎日だったことには、3つほどの理由が挙げられます。まず、ほぼすべての照明器材の吊り込みが終わったときに美術デザインが大幅に変わりました。改定照明図面を急いで仕上げ約8割の吊り位置を変更し、なんとか予定どおりにフォーカスを行いました。準備不十分でフォーカス時間の延長は避けられませんでした。また、プレビューの途中で役者の1人がプロダクションを去り、サンディエゴで同じ役を演じた役者が急遽呼ばれたことは、多くの照明キューの変更を必要としました。そしてなにより、ホルダーさんがほかの仕事と掛けもちであったため、彼の不在は私により深くプロダクションと関わるきっかけを作りました。

交代の役者が午後4時に劇場へ到着した日も、プレビュー公演の幕は午後8時に開きました。彼はサンディエゴ公演を大成功に導いたクリエイターの1人であり、本番前に2時間調整しただけで舞台に立つ勇気と実力は本当に尊敬します。そしてその日、午後4時までの舞台稽古中、代わりに舞台に立ったマーティンさんは想像を絶する素晴らしさでした。確かに彼の戯曲だから彼が一番役をわかっているとはいえ、彼ほど素晴らしい役者を目の前にしたのは初めてです。いつかまた、彼の作品に携わることができることを願っています。